

AR CA DIA

51
WINTER 2012

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽二人の姿かたちを描く

館長 榊原悟

謹賀新年

新春といえ、何もかもが掃き清められ、もの皆すべてが背筋を伸ばす。そのキリッとしたたたずまいが好きだ。

待春や机に揃ふ書の小口

芭蕉門にも連なつた本願寺僧浪化(東本願寺十四世啄如の子一六七〜一七〇三)の佳句である。待つ春とある限りこの二句、春の訪れを待つ冬籠りを詠んだ、とすべきだろうが、明窓、浄机の上につきつちりと揃えられた書の小口ならば、正月を迎え凛とした書齋の空気こそが、相応しい。むしろ新春の二句と云うべきか。

その新春は、新芽が張り、よろず萌え出づる若草の季節である。来し方よりも行く末を思う時だろう。

とち糸のいろわかさやはつ曆

となれば、もう久保田万太郎(一八八九〜一九六三)が吟じたように、初曆のとち糸の色は、若草色以外にあり得まい。

その初曆に一年の、いや、行く末の自分に思いを馳せ、襟を正す。初春を迎えたわたしたちを抱く、ごく自然な心の動きであるだろう。

安永七年(七七八)の佚山こと常足道人(二七〇二〜二七八)も初春を迎え、そうした気持ちを抱いたひとり。しかもこの年佚山は七十七歳、稀寿を迎えた。となればその年の春正月、さらなる人生への覚悟を披瀝しておきたいと思うのは当然であるに違いない。ここに紹介する、その自画自賛画像が、何よりそうした佚山の心の中と姿を明かすが、それについて述べる前に、あらかじめ佚山その人について一言触れておく必要があるだろう。というのもこの佚山のことを知る人が、どれ程いることか。余程の美術好きでもない限り、その名を聞いて作品を思い浮べることができない人はいないと思われるからである。

その佚山、宝曆から明和のころ(二七五〜二七二)京阪を中心に活躍した、いわゆる畸人(俗に居て俗に染まらぬ文人。「畸人」の語自体は伴蒿蹊の『近世畸人伝』および『続近

世畸人伝』全十巻十冊により広く敷衍した)の一人である。俗姓は森本氏。浪華に生まれた。名を時敏、字を修来。元文三年(七三八)出家(曹洞宗)、以後、佚山道人黙隠と称した。常足はその小号である(中野三敏著『近世新畸人伝』岩波現代文庫G134)。若年期、浪華第一の書家新興蒙所について書を学び、とりわけ篆書にすぐれた。いわゆる唐様の書家というのが佚山に対する世評だろうが、彼にはまた長崎に遊び、来舶画人沈南蘋流の画法にも通じた絵師としての二面もあり、特異な形態感覚を示す水墨画や鮮麗な花鳥画は、伊藤若冲(七二六〜一八〇〇)のそれにも近い。再評価の俟たれる絵師である。

掲出の画像は、その佚山が自画自賛したもの。墨染めの衣に頭巾を被つた佚山が、拱手した腕を文机にのせて坐す。傍らに侍者の若僧が控える。二人の衣を描く、濃淡、肥瘦、運筆の速度を自在に変えた輪郭線が、実にうまい。衣褶の重なり、量感が見事に表される。濃淡の墨が塗り重ねられた結果、そこに若冲得意の技法として語られることの多い筋目描き(白い画箋紙に淡墨の筆を重ねて塗り、乾くと共に墨の面と面の間に白い筋目が浮び上がり、それによって花びらや鳥の羽、魚の鱗などを表す水墨技法。小林忠氏によって「筋目描き」と命名された。小林忠「伊藤若冲の多彩な絵画世界」『伊藤若冲アナザーワールド』展図録千葉市美術館二〇一〇年)が見られるのも興味深い。若冲とほぼ同時代、京都で活躍した二世代上の絵師として佚山の画業はさらに注目していく必要があるだろう。

さて、その画像の佚山、飄々磊落とした表情が好ましい。まさしく畸人伝中の人である。上方を見つめる柔和なまなざしは、佚山の清廉な人となりを伝えて余りある。思索しているようにも見えるが、画面上方の自賛を見つめているにも見える。その視線を追ってわたしたちの目も、またごく自然にこの賛文に向かう。そこには次のように認められていた。

安永戊戌之歳春正月

不忘仏祖師恩 不忘父母厚恩 不輕隨從給士 不疏朋友少恩
不述雜談虛誕 不懈每朝誦經 不結好交高貴 不求他借金銀

ESSAY

不受蒙恩微祿 不慮期朝有余 不諂諛不破戒 不宿債不食言
 不弄長物奇具 不貯褻服余衣 不勤節序札儀 不慢來簡返書
 不食重菜厚味 不定常住家居 不貪貧利俗客 不尋無用在家
 不忘可吝返報 不怠可為所為 不著外物得失 不爭世財重輕
 不驕慢不吝惜 不病苦不剛堅 不關助明眼鏡 不禁養老小盃
 不恥誤而懺悔 不憶老而見聞 不捨所業筆墨 不脫頭巾人前

右常足道人三十六不 時七十有七

安永七年正月、新春を迎えてのまさしく覚悟を述べたもの。覚悟とは云つても、むろん空理空論の類ではない。日常生活における行動指針といふべきだろうか。実践すべきこと、やってはいけないことなど、都合三十六項目を挙げる。「仏祖師恩 父母厚恩を忘れない」に始まり、借金しない、媚び諂わぬ、ぜいたく(重菓厚味)しない、など現在のわたしたちにも範とすべき徳目が並ぶ。「養老小盃を禁ぜず」なるほどと思う。が、文末「頭巾を人前に脱がず」―真面目に三十五の徳目が挙げられてきただけに、最後にこう云われると、のけぞってしまうが、出家の身には、人前で頭巾を脱ぐことに禁忌の気持ちがあつたものか。しかし、いまは、この二項目に佚山の人間味とユーモアを見ておきたい。というのも、三十六項目を述べるのに佚山が趣向を凝らしているからである。指針一項目につき漢字六文字を当てていること、しかも、それらすべての文頭に「不」という打消しの語を置いていること、である。そうであればこそ「三十六不」の自画像であつたのだが、おそらく佚山は三十五まで「不」の字を付した徳目の列挙を、ほぼなんなくこな

安永戊戌之歳春正月

不忘佛祖師恩 不忘父母厚恩 不輕隨從給仕 不疏朋友少恩
 不迷雜談虛誕 不憚每朝誦經 不結好交高貴 不求他借金銀
 不受蒙恩微祿 不慮期朝有餘 不諂諛不破戒 不宿債不食言
 不再長物奇具 不貯褻服餘衣 不勤節序禮儀 不慢來簡返書
 不食重菜厚味 不定常住家居 不貪貧利俗客 不尋無用在家
 不忘可報返報 不怠可為所為 不著外物得失 不爭世財重輕
 不驕慢不吝惜 不病苦不剛堅 不關助明眼鏡 不禁養老小盃
 不恥誤而懺悔 不憶老而見聞 不捨所業筆墨 不脫頭巾人前

右常足道人三十六不時年七十有七

したのだろう。しかしもう一つ三十六番目の徳目を挙げなければならない。そこで思案、エイヤツと捻り出したものこそ、「不脱頭巾人前」であつたのではなかつたか。しかし、ここにこそ佚山の素顔が現れる。となれば「不脱頭巾人前」―このわずか六文字にむしろ崎人佚山のユーモアを感じるのに無理はあるまい。

が、それはともかくこうした工夫で贅文は見事に整えられ、形式美が与えられることとなつた。「不」の繰り返しが書に一定のリズムをとる。画面上半分を贅文が占める。稀寿を迎えた佚山にとつて三十六の徳目の実践は、やはり強い覚悟を持ったものであつたのだ。

となるとその徳目がどうして三十六であつたのか。参陽隠士石川丈山も、自らを名乗る際、しばしば「六々山人」を冠していることからすれば、脱俗の文人、隠士たちに好まれたものなのか、何か三十六の数字に意味があるのかも知れない。切にご示教を乞う。

しかし、それにしてもここに描かれた佚山の風貌、そのたたずまいは若々しい。わたしたちもあやかりたい。そこでわたしも佚山の響にならい「十不」を賦し、凡夫の覚悟を示しておこう。暮れには結局、「行年や壁に耻たる覚書」と詠んだ榎本其角(二六六―一七〇七)のようになつてもいいではないか。それもまた凡夫の生、初春の覚悟であるからだ。

不嘆薄知凡骨 不怠勉学読書 不追名利余財 不拒美酒佳肴
 不散財不吝嗇 不鯨飲不馬食 不貪夜更惰眠 不恐三日坊主
 人生無事名馬 健康第一々々

本年も岡崎市美術館 ほかざき世界子ども美術館をどうぞよろしく。



《常足道人「三十六不」自画像》

ESSAY

芹沢銈介展

—手仕事を愛でる—

千葉真智子



丸紋伊呂波の以

私の見た芹沢銈介、宗廣さんの見た芹沢銈介

民芸運動を代表する作家、芹沢銈介の作品を見ると、絶妙な色彩感覚と構成力に、感心せずにはいられない。同色系の中に二つ異なる色を織り交ぜたり、シックな地に目に鮮やかな色をのせたりと、組み合わせの発想は何とも豊かで、とても真似できるものではない。美術作品についてはしばしば求められる「オリジナリティ」——そもそも美術作品における「オリジナリティとは何か？」という大問題があるのだが、ここでは保留するとして——という点について、芹沢作品を鑑みると、中国・朝鮮の飛白体文字に想を得たり、伝統的な扇面模様を転用したり、旅先の風景を造形化したりと、多くの場合、先行する文様や元ネタと言うべきモチーフがあるものの、換骨奪胎、出来上がったものは、極めて芹沢らしいものへと帰結している。

だからなのか、芹沢作品は、非常にアイコン的に視覚に映りやすく、おそらくこうしたこともあって、商品や商業デザインとして採用されることも多いのだろう。下絵・型紙の制作から染めまでの作業を一貫して手がける「型絵染」の大家として、「人間国宝」という近寄りがたい肩書きを持ちな

EXHIBITION

がらも、カレンダー、絵葉書、マッチ箱、包装紙、商品ラベルなどの大量生産品を通して、芹沢の作品イメージは広く流通している。先日も東京の老舗百貨店の食品売り場をぶらぶらしていると、いかにも「芹沢」という模様が目に入り、近づいてみれば、「銀座あけぼの」という煎餅店が、贈答用煎餅のパッケージデザインとして、本展覧会にも出品される有名な《春・夏・秋・冬》の図柄を採用していたのであった。ちなみに面白いのは、その煎餅の商品名が「味の民藝」であったことで、「民芸」という言葉が、本来の意味を離れて、「民芸的なもの」というイメージのもとに如何に日常に浸透しているかを窺わせた。

岐阜の郡上八幡で細織りを手がける宗廣陽助氏は、芹沢の作品に魅せられ、長年にわたりその収集を続けてきた。ただし、柳宗悦の甥で染織家の柳悦孝に師事し、彼を介して芹沢の知遇を得た宗廣さんは、手仕事に携わる人だけあって、その収集方針に大きなこだわりを持っている。つまり、商業的に流通しているデザインものにはわき目も振らず、ただただ屏風や暖簾、帯や着尺など、「型絵染作家」芹沢の真骨

頂とも言える作品群と、ガラス絵や板絵などの一点ものの肉筆作品のみを収集し続けているのである。私などは前述のような商業デザインを目にする、なるほど、東京高等工業学校（現東京工業大学）図案科を卒業し、図案製作会社を設立してショーウィンドーのデザインを手がけるなど、時代の先端文化を感じていた芹沢の出発点を思わされて非常に興味を惹かれるのであるが、宗廣さんは、そこには明確に線を引きしている。また、日本の古い絵馬にはじまり、三春人形、果ては世界各国の民芸品までも買い求めた芹沢と同じように、スペインの教会扉から李朝の筆筒、アフリカの壺まで様々なものを収集し、古民家を移築した自邸に並べるなど、宗廣さんの行動には、芹沢その人の生き方を踏襲しようとする、憧憬さえも感じられる。

芹沢の作品を見る機会はほかにもあるかも知れないが、芹沢という一人の人間に見せられた人間が描き出す芹沢の姿は、ここにしかない。是非、その唯一無二の芹沢展を、多くの人に見ていただき、ものとそれを作り出す人の手を愛で、賞賛する気持ちを、感じてもらえたらと思う。

会期：平成24年2月11日(土)～3月25日(日)

村山槐多は謎の多い画家である。詩を多作して日記も断片的には記しているが、夭折であったこともあり不明な部分が多い。本籍地が岡崎市にあるということは分かっていたが、出生は父親の谷助が教師をしていた横浜とされてきた。ところが最新の調査によって谷助が分家して本籍地を置き、槐多の出生届が出された場所「愛知縣額田郡岡崎町大字裏町三十一番戸」現、愛知県岡崎市花崗町二丁目にあった親戚、嶺田九七

所有の家で生まれた可能性が高いことが分かった。ゆえに本展は初めての村山槐多の大規模な里帰り展といえるのかもしれない。岡崎生まれの画家といえ「創作版画」の先駆者として知られる山本鼎がいる。槐多と同じ岡崎市花崗町二目に生まれているが偶然ではない。彼の母親だけはこの地に生まれており、その妹たまが槐多の母親なのである。つまり槐多と鼎は従兄弟同士であった。槐多は鼎の出生地（岡崎町大字裏町二十五番戸）から、数件西にいったところにあった嶺田の家で、彼の十四年後に生まれたとみられる。

鼎は当時十四歳の槐多の絵に溢れんばかりの才能を見抜き画家になることをすすめた。彼は反対する父親を説得

するなど、槐多が画家になるために惜しまぬ援助をし、ヨーロッパに留学する際には、槐多の面倒を友人の画家小杉未醒に頼み学費の面倒までみた。本展では、鼎の作品も約二〇〇点展示し、二人の深い絆も紹介している。

また一九八二年に発見された槐多の三〇〇号におよぶ「新発見の大作」——後にその下絵らしき鼎の小品が見つかった「鼎の作」と訂正された『日曜の遊び』（一九三五年）も出品している。本展ではこの作品を約二十年かけて調査研究した拙論をもとに、実際は誰の作だったのかその謎に迫った。オープニングでは『謎の大作』『日曜の遊び』をめぐるというシンポジウムを開催した。パネリストには信濃デッサン館館主、窪島誠一郎氏と、原田光氏（元神奈川県立近代美術館学芸員、現在岩手県立美術館館長）を招き、進行役の私も含めた鼎談というかたちとなった。この大作の作者が誤認であったという衝撃的ともいえる出来事は、当時その渦中にあつたお二人にとっては忘れがたいことであつたようで、その長年の思いを語っていた。原田氏は発見当時、槐多の作品と見なして展覧会に出品した話してから、鼎の同じ絵柄の下絵が発見された時に、大作も鼎の作品と改められた

EXHIBITION

理由を明確にしながらその経緯を述べた。窪島氏は、大作発見当初から槐多の作品だと確信していたが、下絵の存在は動かしがたく、鼎の作と見直した時の心境などを語った。そして最後にはお二人とも拙論の考証「鼎が下絵を描き、それを槐多が大作にして描いた」、つまり『日曜の遊び』「大作」は村山槐多の作として異論は無い」という結論のもとにシンポジウムは終了した。

私は二十五年前にこの奇妙な大作に出会って購入を担当して以来、学芸員であるかぎり作者特定を明確にすべきだと考え続けてきた。しかしそれは、過去に作者が見直されものを再度元の作者に戻すという、美術史上においても、きわめて稀な事例であり難題であつた。これで行くやうに数奇な運命に翻弄された「槐多作の大作」は、落ち着くことができるのではないか。

現存する槐多の作品のほとんどが出品されたと言われる本展では、このような再検証や新たな発見があり、いまままで謎の多かった槐多の知られざる実像が少なからず浮かび上がってきたよう思われる。岡崎が生んだ夭折の天才、村山槐多の研究と調査をこれからもすすめてゆきたいと思う。

村山槐多の全貌

—天才詩人画家22年の生涯—

村松和明

大作の謎を解き、新たな実像が浮かび上がる
岡崎が生んだ夭折の天才、村山槐多

会期：平成23年12月3日（土）～1月29日（日）



「村山槐多の全貌」展、「日曜の遊び」会場風景

展覧会所感 (1)

浦野加穂子

二〇二年は浄土宗を開いた法然の八〇〇回忌、その高弟で真宗の開祖親鸞の七五〇回忌に当たり、当館では「三河浄土宗寺院の名宝―浄土へのいざない―」を開催しました。全国各地でも両祖に焦点をあてた展覧会が催されましたので、その主なものを今一度振り返ってみていきたいと思います。

まず三月十七日より京都市美術館で開催された「親鸞展―生涯とゆかりの名宝―」。国宝「教行信証（坂東本）」など、東西本願寺をはじめ、真宗十派の本山や寺院の資料を通して親鸞聖人の教えと事績、浄土真宗のひろがり等を紹介してしました。

三月二十六日より開催の京都国立博物館特別展「法然―生涯と美術―」は、法然の伝記の集大成ともいえる国宝「法然上人絵伝（四十八巻伝）」を軸に、法然の生涯と思想、法然をめぐる人々と念仏信仰の広がりを取り上げ、ゆかりの品々を一堂に会した大回顧展でした。両展では各展のチケット半券で相互の入場割引サービスも行われました。

四月五日には京都西本願寺の向

かいに龍谷ミュージアムがオープンしました。開館記念展「釈尊と親鸞」は、仏教の源流をたどり、釈尊と親鸞それぞれを「仏（生涯と足跡）」「法（教え）」「僧（教団とその展開）」の三つの視点から紹介しており、高名な資料だけでなく、目にする機会の少ない地方寺院の名宝も取り上げた興味深い構成でした。

最後は十月二十五日より東京国立博物館で開催された「法然と親鸞―ゆかりの名宝―」です。本展は両宗派からの協力を得て、法然と親鸞ゆかりの名宝を一堂に会し、その全体像に迫った展覧会で、両上人の生涯や師弟関係に焦点を当て、それぞれの思想が互いに密接に関わりながら、深められ発展していく様子を紹介していました。

各展を通じて、同じ資料でもそれぞれの展覧会の意図や構成により意味付けが異なり、それにより個々の資料のもつ意味が深められていく点が興味深く感じられました。当館でも資料を生かし、来館者の皆様により理解を深めて頂けるような展示を心がけていきたいと思っています。

COLUMN & TOPIC

展覧会所感 (2)

千葉真智子

ここ最近（このテキストを書いたのは十二月半ば）見た展覧会のなかで、印象深かったものをつらつらと考えてみる。名古屋大学での文谷有佳里の公開制作に兵庫県立美術館の「榎忠展」、それに国立国際美術館の「世界制作の方法」だろうか。即興的にペンやインクでドローイングを描く文谷は、机上の紙に線を引いたかと思えば、アクリルの壁面にペンを走らせ、今度は、壁に展示した画用紙に線を描く。ギャラリー内を行ったり来たりする姿は、まるで鼻歌を歌っているかのように軽やかで、意識と無意識の間をふわふわしているように、見ていてとても心地よい。

榎忠展は、私がこれまで見た彼の展示の中で一番印象深かったのだが、それは、錆びて汚れた（つまり使用後の）葉莖をうず高く積み上げた作品の持つ強度のせいだったと思う。明らかに人型の墳墓を想起させるその作品は、人命を奪う道具である葉莖が、その奪ったはずの命を弔うという矛盾した構図と、作品それ自体のこぼれんばかりの物量によって、さら恐ろしさを感じさせるのだが、同時に、暗い展示室のなかでス

ポット照明を浴びてきらきらと葉莖が光を反射する様には、圧倒的な美しさがあり、崇高ささえ感じられたのである。

そして、「世界制作の方法」における作家たちのスケールの大きさ。なかでもクワクポリョウタの作品は、暗い展示室の床にカゴや色鉛筆などの日用品を配し、その中を電球付きの鉄道模型が縫うように走ると、ビルや木々のような影を壁面に映し出すという仕掛けで、暗闇のなかでじつとしてみると、その建物の影に飲み込まれるような感覚に襲われたり、突然大きな木々に直面したりすることになる。それは展覧会のタイトル通り、いまこの小さな展示室のなかで新しい世界が立ち上がるのを目の当たりにしたような感覚で、本当に、世界が広がっていくような高揚した気持ちにさせられた。

規模は様々だが、ここに挙げた展示では、美術作品との対峙という次元を超えて、別の世界、新しい感覚に触れるような大きな感情の湧き上がりがあり、自分がそこに在ることの喜びを強く意識させられたのであった。

集荷の旅は胸に沁みて (6)

荒井信貴

集荷の旅はいつも美術品に優しいエアサスペンションの美術品専用車と道連れです。二トン車ですが、座席が二列なので通常のトラックより長く、東京の下町では、角を回るのが苦労します。駐車余地がない場合は遠くに駐車し、台車や延々手持ちで運ぶことになり、侵入路が細く車が入れず、しかも借りる物が大きく重い場合には、もう一台小型の車を手配して中継させることもあります。そして車では不可能な場所も。それが徳川家康最初の墓地として知られ、昨年建物が国宝指定を受けた静岡市の久能山東照宮です。ここには「徳川家康関係資料」や歴代将軍が寄進した多くの宝物を収める博物館があり、家康愛用の「目器」「洋時計」「びいどろ薬壺」(いずれも重要文化財)を借用に伺いました。有度山を登り日本平の駐車場に車を置いたのは日の傾きかかった頃、ダンボール板など梱包資財を持って急いでロープウェイに乗車、向かいの久能山へと渡ります。すぐに作品の状態確認と梱包作業を開始。作業は時間との勝

負でした。五時過ぎの帰りの最終便に間に合うようにとの思いでした。乗り遅れば、南の太平洋側に続く千数段の階段を、ダンボール箱を抱えての下山となつてしまうのです。何とか間に合つての帰還。東照宮神職の皆さんは、朝夕、参道であるその階段を登り降りしているとの話しを伺い頭の下がる思いでした。

山と言えば四国の金刀比羅宮に冷泉為恭の「琴棋書画図」を借用にいつた時を思い出します。輸送業者とは本殿直ぐ下の社務所で待ち合わせ。時間に間に合うよう千段余の有名な階段を必死に登りました。汗を流し、息を切らして到着すると目の前には美術専用車が。車専用のルートがあったのです。こんなことなら麓で待ち合わせればと後悔もひとしおでした。ただ、本殿から眺める讃岐平野の光景が唯一の救いとなりました。

ミュージアム・マネジメント研修に参加して

稲垣満春

美術館や博物館に係る人材育成の充実と経営意識の向上を目的として、昨年の十二月十二日から十四日までの三日間、東京の国立新美術館において「ミュージアム・マネジメント研修」が開催されました。文化庁主催の研修会で、全国の美術館や博物館から五十一名もの受講者があり、私もそのひとりとして参加いたしました。内容は、講義、事例研究、グループワークと理論より実践を重視したものでした。講師陣も、画廊

経営者、温泉旅館の当主、大手広告代理店のCMプランナー、大手ホテルのマスタートレーナー、

ドイツ・ブランドの顧客サービスに携わつて来られた方など、企業経営の最先端で活躍されている方々が中心で、これまでにないスタイルの研修でとても充実した三日間でした。

いま全国の美術館や博物館は、コスト削減や人員の削減、指定管理者制度の導入など、厳しい運営を余儀なくされています。市民サービスの低下を招くことなく施設を運営していくには、何が必要なのか。この課題に真摯に取り組んでいかなければとこの研修を終えて改めて強く感じた次第です。

書報 芳賀徹『藝術の国日本―画文交響』

荒井信貴

今回は、書評ではなく書報です。芳賀徹前館長の著作『藝術の国日本』が『蓮如賞』を受賞、十二月十日、京都で行われた授賞式に列席してきました。サントリー学芸賞などの選考委員を務める先生が、賞を出す側から受ける側となったのです。

蓮如賞は、日本人の精神文化に深く根ざした優れた文学(ノンフィクション)に対し本願寺文化興隆財団から贈られる賞です。選考委員には、梅原猛・三浦朱門・柳田邦男・山折哲雄の四氏と日本屈指の識者が名を連ねています。大谷暢順財団理事長から賞状を受け取る先生もめずらしく緊張気味でしたが、すぐにいつものにこやかな表

情に。その姿を見て、こちらの喜びもひとしおでした。なぜならこの本、館長時代に芳賀先生が様々な機会に書かれたエッセイをまとめられたもので、『藝術の日本』とは、「から始まる巻頭エッセイは当館企画展『日本人の風景表現』図録から。最後に置かれたのも『パリの極楽浄土―モネ『睡蓮』の世界』で本紙に掲載したもの。他にも書いていただいたエッセイが何編か含まれているからです。詩歌と美術は絶えず交わり、日本独自の文化を築きあげ、世界に発信するとともに、日本人の明日への誇りを抱かせる原点なのだ」という先生の声が伝わってくる本です。

INFORMATION

村山槐多の全貌

12月3日(土)～1月29日(日)

■講演会

1月22日(日)「夭折の天才、村山槐多の謎—引き裂かれた絵の真相」

村松和明(当館学芸員)

■学芸員による展示説明会

1月28日(土)

※いずれも午後2時から

宗廣コレクション

芹沢銈介展 — 一手仕事を愛でる— ある染織家の渾身の蒐集

2月11日(土)～3月25日(日)

■記念講演会

3月3日(土)「所蔵家が語る芹沢の魅力」

宗廣陽助(絨織り制作者)

■講演会

2月26日(日)「民芸の思想と個人作家—蒐集と創造—」

濱田琢司(南山大学人文学部日本文化学科准教授)

■学芸員による展示説明会

2月19日(日)、3月18日(日)

※いずれも午後2時から

旅のスズメ—沖繩の光と影—
私は旅が好きである。先日、担当の展覧会が一段落したところで、代休を利用して沖繩へ旅立った。大自然の中でリフレッシュしようと胸躍らせていたが、旅行中ずっと雨模様の天候であった。そう、私は強力な雨女なのである…。しかし地上の天気がどうであろうと、海の中は別世界。とりわけ離島の海は美しく、特に冬は水が澄んでいる。水圧を感じながら、自らの呼吸音のみが響く静かな碧い海の中、色鮮やかな魚たちと一緒に泳いでいると、すべてを忘れ自分も自然に溶け込んだようでワクワクしてくる。まさに至福の時である。

旅の後半は小雨交じりの中、沖繩本島の南部を巡った。琉球王国最高の聖地である斎宮御嶽に参拝後、平和祈念公園、喜屋武岬、ひめゆりの塔などの戦跡を訪れた。平日の昼間で修学旅行生が多く、展示に無関心な生徒も多かったが、戦闘の犠牲となった女性や子どもたちの生々しい亡骸の写真パネルや証言集を前にすると、一様に口数が少なくなった。展示には現実と対峙することの大切さと、その歴史を伝えようとする強い覚悟を感じた。美ら海の島、日本唯一の地上戦の地、いずれも沖繩の現実である。沖繩の光と影とともに感じた旅であった。(浦)

おしゃべり、あれこれ。

朝風呂で妙案!?

朝風呂に入ることが最近多くある。寒い朝、出勤前に体を温めてから家を出るのである。寒いときこそ、朝の仕事始めには体の切れがよく、快調である。朝風呂というと、深酒でそのまま寝てしまった時や旅行の時に経験がある方もあるであろう。怠惰な生活習慣というイメージがあるが、実際には体の調子もよく仕事もはかどる。

温泉(ゆ)の底に我が足見ゆる
けさの秋 与謝蕪村

蕪村の句は夜が明けてからの朝風呂での光景を詠んだものであるが、我が朝風呂は早朝、夜明け前の暗いうちである。出勤前に十分時間を取るために、未明になるのである。湯船に浸かりながら、じつと今日一日のことを思う。夜だと風呂のなかで眠ることがあるが、朝風呂で眠ることはない。頭のなかですっきりしている状況のなかでは、瞑想はない。考えが前進するのである。原稿のヒントを得ることもある。また、平日は湯船に浸かる時間があまりとれないが、休日には蕪村の句のような優雅な朝風呂気分に分ける。いずれにせよ、朝風呂の時間は貴重な時間である。あなたも行き詰まったときに早朝の朝風呂で解決策を考えてはどうですか。(堀)

編集後記 | 明けましておめでとうございます。本年もよろしく願い申し上げます。本年最初のアルカディアですが、原稿を用意したのは昨年末。そこで、この一年を振り返るということで、他館の展覧会を見た所感なども掲載しています。毎日、各地で様々な展覧会が開かれていて、見たいもの全てに行くには体と資本が足りないのが悔やまれますが、これは、という展覧会をまた本誌でもご紹介していきたいと思えます。(千葉)

表紙図版：芹沢銈介《州浜形四季文屏風》(部分)1970年



開館時間 午前10時～午後5時(6月～9月は午後6時まで)

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第51号 2012年1月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA